

6月から研修医の研修?!が始まりました。なぜ6月かと言うと、医師免許が発行されるのが6月だからです。研修医、と言うと医者ようですが、全く医者ではありません。小生は整形外科に入局し、整形外科の研修を行うと思っていたのですが、すべての科の研修を2年間かけて行わなければなりませんでした。

当時の研修医制度はかなり悲惨な状況でした。当時の研修医は大学によって状況は異なるのですが、小生が選択した「名古屋保健衛生大学」の研修医制度はかなり厳しく、他の多くの医大とは異なり、いわゆる「あゝ野麦峠(※1)」のような状況でした。当時病院の正面玄関の北側に主に24時間救急車や、緊急患者さんを受け入れる玄関がありました。常に警備員が3人常駐し、受付を行っていました。その玄関の真正面に100人を収容できる研修医棟があったのです。1年目の研修医50人。2年目50人を想定していたと思われます。実際ほぼ常に満室でした。

当時の「名古屋保健衛生大学」の研修医制度に関して、記憶をもとに振り返りたいと思います。多少の齟齬がありましたらご容赦ください。研修医は1年目、2年目共に24時間研修医棟にすることが当然とされていました。実際は不可能なことで、「緩めのお約束事」というような取り扱いではありましたが、科によってはお約束事では済まされません。当時、名古屋保健衛生大学の位置する豊明市には、市民病院がありませんでしたので、藤田学長の「救急車はもとより、緊急患者は決して断るな!!」と言う号令の下、すべての緊急?患者を受け入れておりました。もちろん、救急車の受け入れは愛知県下の病院では最多でしたし、夜中の豊明市民の緊急受診にも対応しておりました。

大学病院といえども、整形外科は外傷患者さんの受け入れが最も多かったですし、ちょっとした外傷の受け入れも当たり前でした。それが、当時名古屋保健衛生大学が「豊明市民病院だ」と揶揄される所以でもありました。新設医大の悲しい宿命です。そのため研修医1年目は毎日のように夜中に何回も呼び出されました。整形外科入局同期は6名いました。2年間の間に内科、外科、小児科、産婦人科、整形外科、泌尿器科等全科の研修を受けなければならないため、6人の研修医が入局していても、整形外科に残っている研修医は1人居るか居ないかでした。したがって、大学病院に残った整形外科研修医は、ほぼ毎日夜中に数回呼び出されます。ひどいときには30分ごとに起こされることもあり、また、外傷症例では緊急手術が必要な患者さんが多く、手術の手配や指導医への要請、患者さんのケア、緊急手術の助手などが続き、ほとんど寝れない毎日でした。

(2024年3月5日)

※1・・明治から大正時代、製紙工場に出稼ぎに出ていた少女たちの過酷な境遇をまとめた山本茂実のノンフィクション作品。